

書 評

前田速夫著『「新しき村」の百年——〈愚者の園〉の真実——』を読む

生 業 と 付 き 合 い

—— ムラに生きるためには ——

蕭 紅 燕

あれは確か今年3月11日付ラジオ深夜番組だった。前田速夫氏「新しき村を語る」というお話が放送されたのは。偶然その日、研究室に入り浸って夜なべしていた。

「あっ！誰か新しき村のことしゃべっているんだっ！」想わず耳を澄まして聞き入ってしまった。

途中からなので、番組終了後、すぐにインターネットで検索してみた。懐かしいあの新しき村についての、氏の最新著書が刊行されたことを知った。

調べたついでに、アマゾンで即購入。本がやがて届けられた。封を切ってぱっと章立てに目を通してみて、こりゃ、面白そうだ！『新しき村』機関紙編集担当の小島さんにすぐ電話をかけた。

東京時代、新しき村を訪ねた際か、面識のある小島さん。そのご好意に甘えて、これまで村の雑誌に何度か寄稿させていただいたが、野暮用と怠惰のため、いつもメ切を厳守できず、ギリギリになって、ざっとしたものしか綴れなかったクヤシサが残っている。しかし、素晴らしい本が刊行されたので、熟読のうえ、ちゃんとした読後感を書きたいという気持ちを伝えた。

その後、小島さんご自身による書評が送られてきた。『「新しき村」の百年』を読む、というお題である。村外会員だが、14年前から村内に家を持ち週三日

も村でお仕事に励まれる小島さん。そして月二回も村の寄合に出席され、法人役員でもあるというお立場。近頃の表現でいうたら、さしずめ「二地域住まいの生活者」ならでは、その貴重な見解はとても勉強になった。

さらに書評のなかで重要な参考文献も挙げられている。奥脇賢三著『検証「新しき村」——武者小路実篤の理想主義——』（農文協 1998）。これもすぐにネット検索したものの、新書とは違ってかなり高値なので、最寄りの大学図書館にないのか？調べてみると、愛媛大学に所蔵されていることが判明し、これも早速取り寄せておいた。

自分は来日当初の1986年か、その翌年に青春18号に乗り継いで、東京から日向の村を訪ねた。真夏の高鍋駅までバイクに乗って、村内会員の省吾さんが迎えに来てくださった。あれこれ用事を済ませつつ一路、村に向かった記憶がある。奥さまのヤエ子さんも快く迎え入れてくれて、当然のように、その晩はお家に宿泊することになった。その後村外会員となり、村の行事に幾度参加し、木曜会にも一時は足繁く通い、村外会員の石川清明さん、関口弥重吉さん、島村豊さんたちに交えていろいろ勉強させていただいた。

あ、想いだした。確か省吾さんの上京に合わせて、毛呂山の村を訪ねることもあったな。自分が撮影した写真がまだどこかに残っているはず。そういえば、確か1986年、東大大学院総合文化研究科へ提出した小論文、手書きの拙稿は、「新しき村と周作人」について綴った。

北京大学卒業後、3年7か月にわたる社会人生活を経験してのちに、再度大学に戻った24、5歳頃であった。修論もこれについてまとめるつもりなのだが、図らずも挫折し、そして縁あって東洋大学大学院で、人類学の勉強をやり直したのである。

1997年の高知赴任に前後して、村からはすっかり足が遠のいた。しかし、何年前だろう、日向の村の消息を風の便りで知って、再び関連動向に注目するようになった。また、3年ほど前に石川さんから久々にご連絡があり、気が向いたら村の雑誌に何か寄稿してみてもは？というお誘いが嬉しかった。ただ、村のことについては何も勉強していないし、頭のなかの、村モードへの切り替えはかなり時間を要したようで、我ながらもどかしい想い。

私事ばかりで恐縮だが、高知大学でのポストは「地域社会学」。おりしも前任大野晃はかの有名な「限界集落」という用語の生みの親である。わたしは大野先生とは違った視点と手法を心がけており、田舎暮らしの試行錯誤をあれこれ積み重ねてきた。十数年前から週末農業を目指し、有機野菜も自分らの手で育て、家人が農協準会員であり、良心市はじめ日曜日出店なども経験している。1970年代の高知大OBたちが創設した環境にやさしい、持続可能な農産物流通・販売会社である高生連さんはじめ、高知県有機農業研究会、雑穀研究会、日本オオカミ協会などとも出会えた。県内外を問わず、有機農業や都市農業、その他多分野にわたる有志の方々と繋がっている日々である。

この地域社会学の持ち時間に近年やっている内容は、もっぱら自分ながらの「田園回帰解説」であり、第1, 2回授業は基本、理想郷・大同社会・ユートピアについての概説だが、主として陶淵明の桃源郷と実篤主導型新しき村の実践などの事例を取り上げている。そうこうしているうちに、山岸会に昔、家族で1年間暮らしたことのある友人（兵庫県尼崎出身、20数年前に高知へ移住）とも出会った。大学時代の同級生が、1980年代後半から1990年代前半にかけて、山岸会に足掛け4年間生活していた頃、わたしも三重まで訪ね、宿泊したことがある。新しき村の木曜会の常連さんにも、確か自分の大学時代の同窓生である祝さんもいつしか加わっていたな。

高知の農山漁村に気が向けばすぐに出かけて、おもろい人を見つけてはいろいろ学ばせてもらう。問題関心は当初の家族、都市化、生老病死からさらに突き詰めてゆき、生業の変遷に次第に関心を持つようになった。IUJターン、嫁婿ターンたちのムラ暮らし、田舎暮らしに一番興味を持っている。そして、老若男女を問わず地域おこし協力隊たちも知っており、興味のある方に出合えば、なるべくFB友として承認してもらい、日々密にも緩くも繋がっている。建前ではなく、高知という田舎、農山漁村を選んで住むかれらの本音をムリなく知りたい。

どうしても、これらの田園回帰者と新しき村の会員たちと重ねて考えてしまうのである。

一方、自分らが本格的に「ムラ入り」を果たしたのは10年前の2008年秋頃。

大学まで15^キ、高知市最寄りの山村に居を構え、通勤生活をして現在に至っている。

そのムラは高知市でも典型的な、紋切り型「限界集落」そのもの……

さて、長い前置きはこのくらいにしておこう。

前田速夫著『「新しき村」の百年——<愚者の園>の真実——』新潮新書 2017年11月20日発行。223頁。さらに帯には、「壮挙か？愚挙か？武者小路実篤が夢見た「ユートピア」の全貌 1918～2017」とあり、日向時代、実篤と若き入村者全員との集合写真も掲載されており、げに刺激的で新鮮な感じの新しき村研究の力作である。

本書は十章から構成されている。ご参考まで紹介しておきたい。

序 日向の村へ 一、「坊ちゃん」登場 二、つるの社会不安／新しき村誕生 三、知識人の冷笑／実篤離村／ダム湖に沈む 四、東の村への移住／東京支部の活動 五、戦中戦後の実篤 六、自活達成と実篤没後の村 七、押し寄せる超高齢化の波 八、ユートピア共同体の運命／液体化する世界 九、ポスト・モダンの帰農 十、創立百年を超えて——人類共生の夢

自分にとって、本書はそれまでの研究書とはまるっきりひと味違った視点のもの、まことに示唆に富んだ素晴らしい内容であり、見聞する限り、新書ではあるものの、新しき村についての最も充実した刺激的で貴重な研究書でもある。書き方は至って平易な表現を心掛けているが、意味深遠である。最も感心したのはムラの生業、村の経済、村を支える収入についての念入りな調査である。前半は創立当初から、戦中戦後の村についてだが、後半の戦後から高度成長期を経て現在に至るまでの村により関心を持つわたしではある。

筆者は冒頭部分の「はじめに」で、新しき村を見直す気持ちになった主要理由として、次の4点を取り上げた。すべて同感したので、記しておく。

1. 新しき村が掲げる自他共生、人類共生の理想。
2. かつて世界各地で雨後の筍のように生まれたユートピア共同体のほとんどがいつのまにか雲散霧消してしまったのに対して、この新しき村は、幾多の危機と困難を克服して、農作物や鶏卵の売上で自活を達成するかたわら、実篤没後も立派に存続し、美術館、生活文化館の建設、いち早くソーラー

発電の導入など、創意と活気を失わなかったこと。

3. その新しき村も近年は赤字続きで、村内生活者の高齢化と死去による急速な人口減少や後継者難もあって、このままでは立ちゆかなくなってしまうと危惧されること。
4. これが一番重要なのだが、皮肉なことに、じつは新しき村のような独自のコミュニティーのありかたが、今ほど求められている時はないと思慮されることだ。大袈裟に言うなら、日本が、世界が、生き残れるかどうかを問うに等しいのではないか。

そして、村の理想に共鳴して近年入村し、足掛け4年間も村内生活したにもかかわらず、やむを得ず離村され、いままも村外会員として新しき村を外から支援している日比野さんのことも、他人事のようにとはとても想えないのはわたしだけだろうか？

ここでざっと結論だけ申し上げたい。村で暮らすには、そして人間の暮らしにはおそらく二大事があるのではないかと考える。生業と付き合い。ナリワイとツキアイ。

言い換えれば、コトのやり取りとヒトのやり取り、事と人、コトとヒト、そして、仕事と人（お付き合い）に集約されるのではないだろうか？

問題解決を図るためには、月並みな言い方だが、やはり「求大同存小異」（小異残して大同につく）の気持ちに常に忘れぬよう努力しなければならない。そして村を元気にするには、どうしても若者、馬鹿者、余所者というサンモンが必要不可欠であろう。そのためには、外部、外野との多様な交流と意見交換の場もなくてはならない。要は、自分らの子供が喜んで帰ってこられるような居場所が理想的ではないかな？！

さて、ここまで殴り書きしているうちに、はや夕方が迫ってきた。メ切まで余裕が全くなく、この辺で筆を擱くしかない。いつもながらの虎頭蛇尾で、またまた尻切れ蜻蛉とんぼになってしまった。本当は前田さんのこの力作を章ごとにくっきりじっくり自分なりに検証し、丁寧に綴りたいのは山々だが、次の機会に譲るとしよう。

